

## ＜特別研究会報告要旨＞

(10月23日)

### 農業土木と農村計画

(農業工学研究所) 有 田 博 之

農業工学にとって、これからの農村計画はどうあるべきか、という問題を若干過去を振り返りながら考えてみたい。

#### 1. 農業工学にとっての従来の農村計画の背景と対応

戦後、農村における「課題」は多くの人に明らかであった。すなわち、農業生産基盤の保全、整備である。工学は、目的が示されるとものづくりを提案して初めて意味を持つ。またそれを作ってこそその世界である。与えられた目的のもと、現実を測定し・観測し、それを客観化・構造化する、そして現実を新たに再現、新しく作るということになる。この過程はとりあえず合理的であった。しかし自ずから限界がある。つまり、①与えられた「目標」が正しい限りということ、②系外の事象に対する無関心、がそれである。現在農村計画の行き詰まりがあるとすれば、こうした事情による。

#### 2. 農村計画研究を進める上での課題

以上を前提に、現在農村計画研究を進めるに当たっての課題をあげておきたい。1970年代、農村総合整備事業がスタートしたのが以下の問題を考える上で大きな役割を果たした。まず第一に、農村生活環境の整備水準が底上げ平準化、して来たことをあげておきたい。これには量的拡大を一途に取り組んできた。ミニマムはある程度達成されたが、今後どうすべきかという課題が必ずしもはっきりしない。第2の問題は計画が市町村単位であったこと。これは自治省の市町村計画とともに、ある程度の合理性は当然担保されたし、また一定の成果を上げたと考えられるが、広

域化への対応が遅れることとなった。第3の課題は資源利用における偏りの問題である。農村計画で利用してきた考え方、技術は、いわば都市的技術、規模による効率性に基づく技術といった一般的なものであった。しかし農村ではことに最近では地域資源の有効利用という面で、小規模技術の利用が望まれる場合が多い。たとえば小落差水力発電などは、研究が進められてもいる。また、それだけではなく財政的制度的な問題も絡んでくる。資源の利用の仕方を変えて行かなければならなくなっている。第4の課題は、まさに現代的な問題としての環境問題への対応である。これまでこの分野の問題は、つくる側からは枠組みの中に入りにくかった。農村計画の立場からは計画論的アプローチを組み立てていく必要がある。そして最後に従来からの土地改良施設の管理の問題がある。土地改良区はいま弱体化しつつあり、それを支えていた従来の慣行も解体しつつある。この問題をどのように農村計画の中に位置づければよいだろうか。

#### 3. 今後の視点

今後の課題は、「地域管理」という問題に引き着く。これを概念的に言うならば、農業生産性の向上、地域資源の活用、アメニティの向上、生態系の保全という4つのことがらを有機的に結びつけて一体的に扱う農村計画技術の開発、ということである。そのためには、これまでの「つくる」という姿勢から「管理」という新しい枠組みへの移行を果たさなければならない。しかもこれら4つは相互に矛盾して、トレードオフの関係になる場合も多い。その調整を管理と呼ぶ。地域は流域などが想定しやすいが、問題によって重層的な領域が選択される。また空間としての地域、ではあるが、これまであまり省みられなかった時間軸にも配慮されるべきことを最後に強調しておきたい。

(文責 合田素行)